

「本校における地域連携(課題研究での取り組み)」

岐阜県立大垣工業高等学校

全日制 佐久間英謙

1. はじめに

本校は、大正15年(1926)に岐阜県第二工業学校として大垣市南若森町に開校し、昭和23年(1948)の学校改革により、大垣工業高等学校と改称、3万4千名を超える卒業生を輩出し、創立95年の歴史を誇る伝統校である。岐阜県内はもとより県外、海外においても多くの卒業生が技術者や経営者として、社会の中核で活躍している。時代の進展にともない様々な学科が新設・改編され、昨年度の入学生から、群制度を導入し、機械工学科群、電気・電子工学科群、建設工学科群、化学技術工学科の3工学科群と1工学科で学び、生徒の適正等により、2年次からは、機械、電子機械、建築、土木、化学技術、電気、電子、情報技術の各工学科8学科で構成され、それぞれの工学科で学んでいる。

2. 大垣工業が目指す生徒像(教育目標)

●大垣工業高校の使命

- ・地域産業の発展を支える産業人材の育成
- ・グローバルな視点で考え行動できる人材の育成



「大工グローバルエンジニア育成プロジェクト」

- ・地域社会に貢献できる人材の育成

●教育目標

- ・誠実にして強くたくましい心と身体の育成
- ・心豊かな人間性と確かな知識・技術の習得
- ・創造性に富む実践的な産業人の育成

⇒「技術者たる前に良き人間たれ！」

3. 本校の取り組み

(1) 地域貢献活動

- ①大垣市「柿の木荘」訪問

- ②テクノラボ事業
- ③元気ハツラツ市(毎月開催)などの大垣市主催のイベントへの出席

(2) 環境保護活動

- ①地域清掃活動(全校生徒による活動)
- ②大垣のお祭り、イベントでの駅前周辺の清掃活動

(3) 国際交流活動

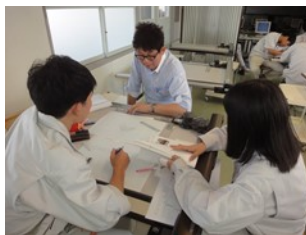
- ①海外高校生との交流
- ②海外インターンシップ
- ③Skypeによる海外との交流

(4) その他の活動

- ①県・各市町村・地元建設企業とのコラボ
- ②地元小中学校への出前授業

4. 具体的な内容

一つ目は、建築担い手育成協議会(岐阜県都市建築部公共建築課の支援)の主催で、地域産業の発展を支える専門的職業人の育成に向けての取り組みを行ってきた。大垣北高校や大垣商業高校の屋外便所改修工事の実施設計などの建築整備(新築及び改修)設計や工事の進捗にかかわり「ものづくり」を身近なものとして触れることを通じて、建築への興味を喚起し、生徒の学習意欲の向上を促すことができた。その中で設計事務所の外部講師(本校卒業生)の高度な技能に触れるだけでなく、ものづくりの心構えについても学ぶことができ、貴重な経験を得ることができた。



「OBによる設計のアドバイス」



「設計概要説明」

二つ目として、大垣特別支援学校(養護学校)との協働により、障がい者用教材・教具を開発したテ

テクノコラボレーションその教材・教具は、各学科の特徴を生かして、今までに、和太鼓を置く台や小学部の児童も乗車できる台車などを製作し、今年度は肘掛付き椅子やプットイン、室内用ストラックアウトを、大垣特別支援学校の子どもの意見をとり入れながら製作した。ただ単にものを製作するのではなく、使う人のニーズに応えることや、障がい者の視点に立ったものづくりを学ぶ機会を得たことは、とても有意義であった。



「プットインの製作」



「課研の反省と課題」



「プレゼンの準備」



「テクノコラボ贈呈式」

三つ目として、持続可能な開発目標 SDGs を題材とした地元中学校との交流を行い、本校 SDGs の複数年にわたる取り組みを紹介し、SDGs の認識を共有することができた。今年度も「情報技術基礎」の授業でSDGsについてのグループ学習を行っている。



「卒業生による説明」

四つ目は、地元小中学校への出前授業を展開した。工業高校の専門分野の知識と技術を生かし、技術・家庭科などの授業の一環として行った。(本校の同中学校卒業生が実際に体験授業の講師として指導)



「距離測定の説明」

木材加工の実技説明」

5. まとめ

生徒たちがテクノコラボや出前授業に参加し、実験や製作のアシスタントを行った結果、地域の方々や児童生徒からお礼の言葉をいただき、改めて自分たちが学んでいる工業の知識や技術の大切さを再認識することができた。そして何よりも工業高校の生徒として自信と誇りをもつことができた。

これまで実施した各事業は、教科横断的な学び、外部人材を活用する開かれた教育課程、主体的で対話的な深い学びなど、新学習指導要領で求められる全てのキーワードに関連している。一時的なイベントではなく、新教育課程に組み込み、効率よく効果的な目標達成に向けた教育が実現できれば、建設工学科がより魅力的な学科になると思う。

新しいことに挑戦することにためらいを見せる一方で、一度きっかけを掴むと目を輝かせて意欲的に取り組む生徒も多い。これからも全職員が生徒を後押しし、何事にも自信をつけさせることが必要であると強く感じる。この様な取り組みを行っていくことが建設工学科の変化につながるものであると認識し、また、変化の激しい社会を力強く生きていくために必要な能力を身につけさせる教育が今後も必要である。



「テクノコラボレーション贈呈式」 新聞記事